本稿は『交通新聞』（2025 年 6 月 24 日付）に
執筆したものを転載しました。

敦賀「ちえなみき」に見る公設民営型書店と駅前活性化

かめやま　ひろき
亀 山　紘樹
交通経済研究所研究員

2024 年３月 16 日の北陸新幹線敦賀延伸開業から１年３カ月。首都圏と直結する新たなターミナルとなった敦賀駅前の公設民営書店「ちえなみき」の集客が好調だ。2022 年９月のオープン以来、延べ入場者数は今年５月に 92 万人を超し、ほどなく 100 万人に達する見込みだ。全国的に書店が減少する中、あえて品揃えを絞るなど従来型の書店とは異なる特性を持つ「ちえなみき」は地元客だけでなく観光客も含めて、駅周辺に新たな人流を作り出している。

図　敦賀駅前の複合施設「TSURUGA POLT SQUARE “otta”」整備の資金スキーム。「ちえなみき」を訪れた客が駐車場を利用するなど、駅西エリアの文化空間としての魅力が周囲に波及することで税収入を増やし、再開発プロジェクトの事業費の一部を賄う。

出典）国土交通省資料から

■稼ぐ公民連携で公設民営書店を運営

「ちえなみき」が入居する複合施設「TSURUGA POLT SQUARE “otta”（オッタ）」の整備は、不動産特定共同事業法のスキームを用いて取りまとめられた。整備した民間事業者は事業費約 31.4 億円の８割超にあたる約 26.2 億円を投資家の匿名組合出資や地元金融機関の融資など民間投資で賄った。行政と民間が機能的に役割分担した「稼ぐ公民連携」を意識した事業モデルで、ホテルや物販施設など収益性の高いセクションは民間が、子育て支援施設や公園、「ちえなみき」など公共性が高い施設の整備・運営は敦賀市が担当している【図参照】。

新幹線の延伸開業に向けて賑（にぎ）わいづくりのため、かねて駅前（駅西地区）の再整備が課題となっていた。2015 年頃から具体的な開発方法を議論する中で、市は駅西を知育・啓発の拠点とする計画を策定。当時地域開発のテーマとして書店の役割が重要になっていたこともあり、市民の居場所であると同時に来訪者の玄関口ともなる施設として「本」を中核に整備することを決めた。「TSUTAYA 図書館」として有名な武雄市図書館に代表される公設民営図書館が脚光を浴びていた時期でもあり、企画段階では敦賀市でも駅近くに立地する市立図書館の分室を設けるプランも俎上に載った。しかし駅前という好立地に図書館を作ると来場者がヘビーユーザーで固まる可能性や、図書館の「日本十進分類法」で配架することで生じるレ

イアウト上の制約などを考慮した結果、最終的に書店とすることを決定し、運営者を公募した。2019 年に丸善雄松堂と編集工学研究所の共同企業体が指定管理者に選ばれ、施設の企画・設計、選書、販売までを一体で受託している。(注：編集工学研究所は丸善雄松堂の子会社)

人件費、運営費等の経費は敦賀市と契約した指定管理料で賄う。丸善雄松堂は「ちえなみき」を先進的な新しい生涯学習施設・拠点という位置づけで他の自治体に展開していくことも見据えた取り組みをしており、2028 年にオープン予定の沖縄県南城市の書店兼図書館の運営も、地域の人々との対話を重視して作り上げていく「ちえなみき」スタイルを応用する予定だ。

■〝知との出会い〟を選書方針に差別化を図る

「ちえなみき」という名称は「知恵・千枝の並木」という語源の造語で、「世界知、日常知、共読知」の３つの軸に基づき、商業ベースには乗りづらい本も含め良著を体系化し陳列。新刊だけでなく古書も扱う。書棚は「文化・生活」「歴史・社会」「生命・科学」などのテーマごとにゾーニングされ、偶然の本との出会い、知的な発見があるよう工夫を凝らしている。

一方で、一般的な書店の売り上げの多くを占める雑誌やコミック、学習参考書といった売れ筋は取り扱わない。敦賀駅近くのショッピングセンター内や商店街に民間書店が存在することもあり、品揃（ぞろ）えによるすみ分けは、「民業」を圧迫しない配慮でもある。

半官半民ではなかなか尖った店舗が作りづらいのではないかと想像するが、「企画当時の担当が、公設書店の先駆けである八戸ブックセンターをはじめ、全国の書店を 100 カ所以上見て回りました。私も本が好きですが、当時別次元に本好きな担当者がおり、本選びについても、オープン時に編集工学研究所と相当議論し選書いただきました」（敦賀市まちづくり推進課西村勇人氏、佐藤雅善氏）。「ちえなみき」の好調な集客の陰には、コンテンツに関する市のコミットもあるようだ。

新幹線、在来線、ハピラインふくい線の列車が敦賀駅に到着すると店内は混雑しはじめ、スーツケースを引いて入店する観光客の姿も目立つ。市では地元客と観光客の割合が約 50％ずつとみており、新幹線開業後、来客数の伸びが加速している。好調な集客を受けて、水曜日休を昨年４月から不定休（月１回程）に変更した。市内の老舗茶舗による日本茶カフェ「中道源蔵茶舗」の併設、オープン以来 500 回以上開催した店内イベントなどとの相乗効果で駅前活性化にもつながっている。敦賀市は、「ちえなみき」の運営ノウハウを新しい公共施設の運用に応用し、本を媒介とした新しいコミュニティ作りにも生かそうと検討を進めている。

◇

鉄道発祥の地英国では、鉄道網の延伸に伴って生まれた貸本店が、「どこの店舗で返却しても良い」というビジネスモデルで読書体験を各地に広めた歴史があるように、駅は書物と読み手をつなぐ媒介としての役割も担ってきた。日本の鉄道開業から150年。新幹線開業を契機に鉄道の町で産声を上げた「ちえなみき」は、書店数が減少しリアル書店の性格や役割が変わる中で、駅前書店の一つの像を提示し、駅に新しい人流を作り出している。地方都市で公共空間のあり方を再構築する参考例として、他地域への展開も期待したい。

「ちえなみき」の㊤店内と㊦外観。「世界樹」を象徴として配された棚が印象的な店内は地元客、観光客で賑わう